

日本独文学会
秋季研究発表会

2015年10月3日(土)・4日(日)

第1日 午前9時50分より

第2日 午前10時00分より

会場 鹿児島大学 郡元キャンパス
共通教育棟1号館・2号館

〒890-0065 鹿児島市郡元 1-21-30

Tel. 099-285-7577

(鹿児島大学法文学部 竹岡研究室)

参加費：1500 円
(学生会員，常勤職のない会員は1000 円)

日本独文学会
〒170-0005 東京都豊島区南大塚 3-34-6 南大塚エースビル 603
Tel/Fax: 03-5950-1147
E-Mail(メールフォーム): <http://www.jgg.jp/mailform/buero>

第 1 日 10 月 3 日 (土)

開会の挨拶 (9:50~9:55) A 会場 (111 教室)

西日本支部長 福元 圭太
会 長 大宮 勘一郎

シンポジウム I (10:00~13:00) A 会場 (111 教室)

旅と啓蒙

—近代黎明期のドイツ文学における旅の表象とその変遷

Reisen und Aufklärung

—Vorstellung und Bedeutung der Reise in der deutschen Literatur

von der frühen Aufklärung bis zur Goethezeit

司会：田口 武史・小林 英起子

1. クライストの『ミヒャエル・コールハース』と旅の啓蒙 市田 せつ子
2. カロリーネ・ノイバー座の旅と啓蒙
—北・中部ドイツにおける興行と『序幕』を例に 小林 英起子
3. J.H. カンペの旅行記
—啓蒙教育家は Volk をどう描いたか 田口 武史
4. ゲーテのロマーンにおける旅と物語 木田 綾子
5. 「旅行文学」の解体
—初期ロマン派と文学のトポグラフィー 武田 利勝

口頭発表：文学 I (10:00~12:35) B 会場 (121 教室)

司会：山中 博心・平松 智久

1. ヴォルフラムの『パルチヴァール』における前史と後史 松原 文
2. 継承か歪曲か？
—ディルタイによる 18 世紀小説像の理想化について 北原 寛子

3. リルケの詩にみられる関係性—所有ではなく連関 高木 靖恵
4. トーマス・マン作品における聴覚的描写の比喩的役割
—『魔の山』を中心に 坂本 彩希絵

口頭発表：ドイツ語教育・語学 I (10:00～11:55) C 会場 (131 教室)

司会：池内 宣夫・田畑 義之

1. 新聞制作を通じてドイツ語表現力を向上させる試み
—「書く」ことを目的とした「話す」こと 柴田 育子
2. 幼児期の発話にみられる心態詞 *doch* と *ja* の使い方に関する発達的变化
—心態詞と内的状態語の関係に着目して 牛山 さおり
3. 文学作品にみられる「日常語」の統語構造
—19 世紀ドイツの文学作品に基づく言語意識史研究の試み 細川 裕史

ブース発表 I (11:30～13:00) E 会場 (125 教室)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

Tertiärsprache Deutsch in Japan:

Der Strategiegebrauch in Abhängigkeit der Fremdsprachenlernerfahrung

Diana Beier-Taguchi

ブース発表 II (11:30～13:00) F 会場 (124 教室)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

Anatomie から診た Benn と Celan

三ッ石 祐子・野口 方子・山口 康昭

ポスター発表 (13:00~14:30) G 会場 (122 教室)
(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

存在表現の地理的分布

—ドイツ語圏スイスの事例を手がかりに

大喜 祐太

ルーブリック評価を導入したプロジェクト授業の実践例と課題

齊藤 公輔・田原 憲和

招待講演 (13:00~14:00) C 会場 (131 教室)

Prof. Dr. Holger Helbig (Universität Rostock)

Vom Aufzählen zum Erzählen

Poetologie und Narration in Uwe Johnsons beiden ersten Romanen

シンポジウム II (14:30~17:30) A 会場 (111 教室)

Literarische Öffentlichkeit in der DDR

Moderator: Arne Klawitter

1. Samisdat als Öffentlichkeitsinsel. Autonome Zeitschriftenliteratur in der DDR
Arne Klawitter
2. Öffentlichkeitsinsel 'Ruhm'. Querelen um das Erscheinen von Brechts "Kriegsfibel"
in der DDR
Thomas Pekar
3. Heiner Müller und sein „Nachwuchs“ des 21. Jahrhunderts
Ryoko Yotsuya
4. „Die Buchstaben tanzten mir vor den Augen wie Mückenschwärme“. Zum
gegenöffentlichen Chronotopos in Katja Lange-Müllers Roman „Die Letzten“
Hiroshi Yamamoto
5. Zur Musealisierung der DDR und ihrer Literatur
Holger Helbig

シンポジウム III (14:30~17:30) B会場 (121 教室)

引き裂かれた「現在」—1830年代の文学と政治
Die zerrissene "Gegenwart" – Literatur und Politik in den 1830er Jahren

司会：松村 朋彦

1. 〈予感と現在〉から〈過去と現在〉へ
—アイヒェンドルフの歴史的パースペクティヴ 須藤 秀平
2. 1835年のスキャンダル—カール・グツコー『懐疑的な女ヴァリー』
におけるジェンダーと宗教 西尾 宇広
3. グラッベ『ナポレオンあるいは百日天下』における
政治的英雄への憧憬と不信 児玉 麻美
4. ヘッベルにおける「外圧」と「自由」
—大衆現象としてのナショナリズムの時代に 磯崎 康太郎

口頭発表：文学 II (14:30~17:05) C会場 (131 教室)

司会：石川 栄作・尾張 充典

1. フランツ・カフカと初期映画
—『観察』における「連続性」の問題 森林 駿介
2. カフカの人間／身体像—ポストヒューマニズム的な萌芽 山尾 涼
3. ドイツ中世文学に登場する Halbwesen (妖なる人)
—そのグロテスクな身体について 渡邊 徳明
4. 「二重の代理人」フォルケール
—『ニーベルンゲンの歌』の詩人が楽人に仮託した役割 野内 清香

口頭発表：語学 II (14:30~17:05) D会場 (211 教室)

司会：荻野 蔵平・恒川 元行

1. ドイツ語の歴史的現在と日本語の歴史的現在 嶋崎 啓
2. 「経験」と「知識」に基づく文法 田中 慎

3. 所在表現における動詞と情報構造の関係

岡部 亜美

4. ドイツ語と日本語の受動文——その基本的な違い

成田 節

ブース発表 III (16:00～17:30) E 会場 (125 教室)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

再考・学習目標の重要性—プロジェクト学習を手がかりに

池谷 尚美・鈴木 智

ブース発表 IV (16:00～17:30) F 会場 (124 教室)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

文化パフォーマンスとしての「ジョージ・タボーリ」ブーム

—1980年代～1990年代初頭の演劇批評をもとに受容の変化を検証する

山下 純照

懇 親 会 (18:00～20:00)

会場：学習交流プラザ：

会費：6,000 円（学生・常勤職のない会員は 4,000 円）

第2日 10月4日(日)

シンポジウム IV (10:00~13:00) A会場 (111教室)

チューリヒ劇場と文化の政治

Das Schauspielhaus Zürich und Politik der Kultur

司会：葉柳 和則

1. 精神的国土防衛とチューリヒ劇場—フリッシュの言説を事例に 葉柳 和則
2. 演出家・ドラマトウルクとしてのブレヒトとスイス
—1948年の二つの上演を中心に 市川 明
3. テル神話解体を試みるフリッシュのスイス像について 中村 靖子
4. 1940年代のデュレンマットの文学活動と精神的国土防衛 増本 浩子

口頭発表：文学 III (10:00~12:35) B会場 (121教室)

司会：杵淵 博樹・冨重 純子

1. 言葉と沈黙—マックス・ピカートの思索を手掛かりに 石井 亮治
2. 記憶を回帰させる詩人の声／身体
—トーマス・クリングにおける朗読とそのパフォーマンス性 林 志津江
3. Günter Grass – Die neue Kanonisierung des Werks Andreas Wistoff
4. ローベルト・シンデルの詩的言語
—〈第二世代〉の二重化する生とその表象 福間 具子

口頭発表：文学 IV (10:00~13:10) C会場 (131教室)

司会：中島 邦雄・堺 雅志

1. ハイน์リヒ・ゾイゼとマルガレータ・エーブナー：
能動性と受動性からみる神秘体験の比較 片山 由有子
2. 動かない空とイモムシの毛—ジャン・パウルのユートピア 嶋崎 順子

3. シラー美学の隠された政治性
—ポール・ド・マンとテリー・イーグルトンの論争から 益 敏郎
4. 「トロープのアレゴリーの永遠のパラバシス」
—Fr・シュレーゲルとポール・ド・マンにおけるイロニーの修辞学 林 英哉
5. ニーチェの同情批判論について 仲井 幹也

口頭発表：文化・社会（10:00～13:10）D会場（211教室）

司会：安岡正義・野口広明

1. 儀礼空間と庭園—モーツァルト『魔笛』の舞台イメージをめぐって 北原 博
2. 雑誌『白樺』および『現代の洋画』における
ユーリウス・マイアー＝グレーフェ受容 野村 優子
3. ヘルダーからリーグルへ—触覚論の系譜の一断面 杉山 卓史
4. 『ブロックハウス事典用図鑑—第4部—今日の民族学』（1849年）
における「日本人」（Die Japaner）の項目 馬場 浩平
5. カール・フローレンツと上田萬年の「翻訳論争」（1895年）と
「その後」をめぐって 辻 朋季

ブース発表 V（11:30～13:00）E会場（125教室）

（ブース発表は途中での出入り自由です）

Sprachlernspiele – ein Unterrichtsmittel mit hohem pädagogischem
Potenzial – Teil 3

Marco Schulze

ブース発表 VI（11:30～13:00）F会場（124教室）

（ブース発表は途中での出入り自由です）

研究グループ試作プログラムによる電子的ドイツ語インデックスの紹介

栗山 次郎

閉会の挨拶 (13:10～13:15) A会場 (111 教室)

鹿児島大学 竹岡 健一

研究発表会期間中、上記のプログラムに加えて、書店・出版社等による書籍展示が行われます。(書籍展示会場：212・213 教室)